宮城県・私立
聖ウルスラ学院英智高校

自立学習支援

学習と部活動の両立をコースぐるみで支え自ら考え動く生徒を育てる

◎幼稚園から高校までを擁するカトリック系の学校。教育特区の指定を受け、4・3・2制による独自の小中一貫9か年教育を展開。高校は、2007年から特別志学コースType１・２、尚志コースの3コース制とする。バドミントンや卓球、ソフトテニスなどは全国レベルの強豪。

高校設立
1959（昭和34）年

形態
全日制／普通科／特別志学コースは共学、尚志コースは女子のみ

生徒数
1学年200～300人

10年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、千葉大、宮城大などに24人が合格。私立大は、東北学院大、東北福祉大、青山学院大、上智大、中央大、明治大、東京理科大、早稲田大などに延べ209人が合格。

住所
〒984-0828
宮城県仙台市若林区一本杉町1-2

電話
022-286-3557

Web Site
http://www.st-ursula.ac.jp/high/

変革のステップ

背景
◎中学校や地域からの要望に応え、進学と部活動の両立を目指す特別志学コースType2を新設
STEP 1

実践
◎部活動を考慮した課外や生徒個々に合わせた学習スケジュール作成で、一人ひとりをきめ細かく支援
STEP 2

成果
◎各コースが互いに良い刺激となり、自ら考えて行動する生徒に成長。高校入試での志願者も増加
STEP 3

「特進クラスで部活動もしたい」要望に応えて新コース設置

宮城県仙台市に位置する聖ウルスラ学院英智高校は、かつては部活動が盛んな女子校だったが、03年度に「特別志学コース」と「尚志（しょうし）コース」を設置し、特色化に乗り出した。特別志学コースは、難関大進学を目指すいわゆる特進クラス、尚志コースは従来からの一般クラス（女子のみ）と位置づけた。05年度には、特別志学コースを共学とした。

特別志学コースでは、共学化した05年度から午後6時30分まで授業を行っていたため、生徒は部活動に参加できなかった。これに対し、中学校の教師や中学生の保護者から「特別志学コースに入学させたいが、部活動もさせたい」との声が聞かれるようになった。

07年度、その声に応え、特別志学コースを難関国立大を目指すＴｙｐｅ１と、学習と部活動を両立しながら大学進学を目指すＴｙｐｅ２に分けた。今回は、学習と部活動の両立の課題改善に取り組んだＴｙｐｅ２を中心に取り上げる。

部活動開始時刻を合わせるため朝課外に一本化

特別志学コースＴｙｐｅ２は、１日50分授業×７コマが基本で、午後４時に授業が終わる。

生徒はそれから部活動の練習に参加する。部活動加入率は6～7割で、学校外の習い事に打ち込む生徒も多い。

カリキュラムと授業は、コースごとに設定されている。ただ、部活動は尚志コースとＴｙｐｅ２が一緒に活動する。コース発足当初、部活動を巡って、尚志コースの生徒とＴｙｐｅ２の１期生の間で不和が生じた。特別志学コースＴｙｐｅ２コース長の及川博暁先生はその理由を次のように話す。

「面談の中で、生徒から部活動について『尚志コースの生徒とぎくしゃくしている』と悩みを打ち明けられるようになりました。その原因は、両コースで部活動の開始時間がそろわないことにありました」

当時、Ｔｙｐｅ２では放課後にも課外授業を開いていたため、Ｔｙｐｅ２の生徒は部活動に遅れて参加せざるを得なかったのだ。特別志学コースＴｙｐｅ２の２学年担任阿部仁先生は、生徒の気持ちを次のように代弁する。

「本校にあるのは、掛け持ち的な気持ちでは練習についていけない部ばかりです。Ｔｙｐｅ２の生徒は、尚志コースの生徒に引け目を感じて練習していた面がありました。そこで、２年目の08年度にはＴｙｐｅ２の放課後の課外を廃止し、初年度から実施していた朝7時45分からの30分間の課外に一本化しました。その結果、生徒同士の関係も良くなり、学習、部活動両面での集中力も高まりました。ただ、今でも課題はあります。Ｔｙｐｅ２では土曜日にも授業がありますが、尚志コースにはなく、Ｔｙｐｅ２の生徒が土曜の練習に参加できないのです。学業の充実を考えると練習時間を完全に一致させることは難しいですが、出来るだけすり合わせ、生徒の意欲に応えたいと考えています」

聖ウルスラ学院英智高校
及川博暁 Oikawa Hiroaki
教職歴15年。同校に赴任して5年目。特別志学コースＴｙｐｅ２コース長。「社会に出て、リーダーになれる人材を育てたい」

聖ウルスラ学院英智高校
阿部 仁 Abe Hitoshi
教職歴18年。同校に赴任して18年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任。「周りに流されることなく、自ら幸せな人生をつかんでほしい」

聖ウルスラ学院英智高校
鈴木祥子 Suzuki Shoko
教職歴20年。同校に赴任して8年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任。「諦めがちな生徒を追いかける粘り強さを持ち続けたい」

聖ウルスラ学院英智高校
後藤健一 Goto kenichi
教職歴19年。同校に赴任して19年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・３学年担任。「人の話に耳を傾け、自分なりの考えを持てる人間に育てたい」

図1　聖ウルスラ学院英智高校のコースの特徴

【特別志学コースType1】
男女共学。目標は東京大や東北大などの難関国立大の一般入試現役合格。週６日制のもと、午後６時30分まで全員が授業を受ける。

【特別志学コースType2】
男女共学。学習と部活動などを両立しながら、難関私立大や中堅国公立大を目指す。東北福祉大との高大連携授業、フランス語の授業など、多様な経験を積める。

【尚志コース】
女子のみ。英語、作法、部活動を三本柱として、厳しく丁寧な指導を行う。大学進学から就職まで幅広い進路に対応し、８割が進学する。

学習と部活動の両立のため一人ひとりのスケジュールを立案

Ｔｙｐｅ２の授業時数は、標準的なカリキュラムよりも3年間で１０００時間ほど多い。だが、多くの部は毎日午後7、8時まで練習をしている。学業と部活動の両立は体力的にも精神的にも大変だ。しかし、生徒は必死に付いていこうとしている。部活動後、教師に質問に来る生徒、隙間時間を何とか活用しようとする生徒など、ひたむきに努力する姿が見られるという。

特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任の鈴木祥子先生は、生徒の意欲は高いと話す。

「そろそろ帰ろうかと思っても、授業での様子から、生徒が質問しに来るかもしれない

と思って待つことがよくあります。部活動で精根尽き果てているはずなのに『追試をしてください』と来る生徒もいます。自分自身が疲れていてもその気持ちに応えたいと思い、残って対応しています」

なかなか学習時間を確保できないのが、生徒にとって大きな悩みだという。

「コース立ち上げ当時から勉強と部活動の両立は、教師が教え込むだけでは難しいと考えていました。主体的に学べる生徒を育て、高校生活を充実させてほしいという思いがあります。ただ、どうすればそうした生徒が育つのかは手探りでした」（及川先生）

「勉強と部活動を両方とも本気で取り組むのは容易ではありません。どちらも精一杯取り組む生徒ほど、壁に突き当たっています」（阿部先生）

Ｔｙｐｅ２では、学習と部活動の両立のために、生徒全員を集めてスケジュールの立て方を指導する。しかし、全体指導だけでスケジュールが立てられる生徒は少ない。その場合、教師が寄り添い、個別に指導する。まず、中・長期的な目標を立てさせ、その達成に必要な短期的目標を立案。最後に目標遂行のための実行項目を１日単位で列挙させる。中・長期的な目標としては模試や定期テストの点数アップ、検定合格など、３か月程度先を見据えたもの。短期的な目標としては１冊の問題集を終わらせるなど、約１カ月先を照準としたものを設定する。

部活動と両立させた学習スケジュール実現の難しさについて、特別志学コースＴｙｐｅ２・３学年担任の後藤健一先生はこう話す。

「目標とスケジュールを立てても、三日坊主で終わる生徒は多くいました。そうした生徒には、提出必須の課題を課すことにしています。課題は弱点補強や検定対策など、生徒一人ひとりの目標に合わせて準備します。最初は『先生に課されたからしなければ』という受け身の学習から始まりますが、成果が出るうちに自分にはどのような学習が必要なのかを実感し、主体的な学習が出来るようになっていきます。その様子を見て、徐々に課題を少なくし、生徒が立案したスケジュールに則った学習にシフトさせていくのです」

スケジュールを実現可能なものとするためにもう一つ重要なポイントとなるのは、生徒と共に隙間時間の使い方を考えることだ。

「生徒の実行項目に従って、『これを実行するにはどの時間を使う？』と問いかけます。『朝６時半に登校する』『昼休みの時間を使う』など生徒によって答えはさまざまです。大切なのは、生徒自身が考えて時間を捻出すること。教師から『この時間を使いなさい』と一方的に伝えても、継続させることは難しいでしょう」（後藤先生）

１年生の間は、多くの生徒がスケジュールを立てるのに苦労する。根気強くマンツーマンに近い指導を続けることで、２年生の後半までには、多くの生徒が主体的に学習する姿勢が身に付いているという。

自身の弱点を把握し夏の課外授業を生徒が提案

「先生、いつ空いていますか？」

09年度の夏休み前のこと。高３になったＴｙｐｅ２の１期生が、教師の夏休みのスケジュールを聞きに来た。夏休みの後半に課外授業はあるが、前半の期間にも教わりたいと考えた生徒たちが、教師の予定を聞きに来たのだ（**図２左**）。自分たちの部活動の空き時間を洗い出し（**図２右**）、教師の予定とすり合わせて、生徒自ら夏休みの課外授業のカリキュラムを組んだ。主体的に学ぶ生徒へと育った要因は他コースの生徒からの刺激も大きいと、鈴木先生は考えている。

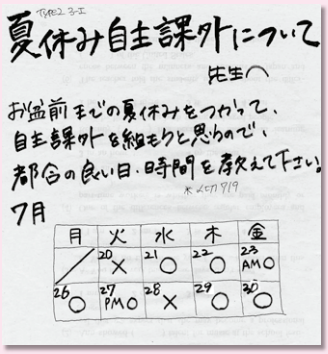
「Ｔｙｐｅ１の生徒は午後６時半まで授業を受け、その後も夜８時頃まで学校に残って勉強しています。更に、帰宅後も学習しています。そうしたＴｙｐｅ１の生徒を間近に見ているＴｙｐｅ２の生徒は、大きな刺激を受けているのでしょう。自分でＴｙｐｅ２を選んだからには部活も最後までやり通したい、Ｔｙｐｅ１の生徒に勉強でも負けたくないという気持ちが強くなっていくようです」

教師が日々手を掛けてスケジュールを作らせていたこととコース間の競争意識が、生徒を自立的学習に向かわせることにつながったのだ。

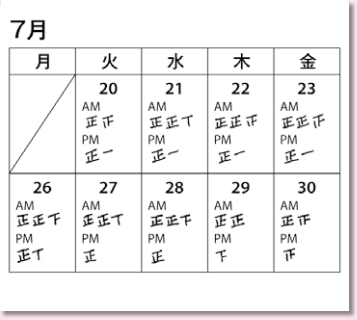
「生徒はスケジューリングだけでなく、『ベクトルの部分が分からないので、この時間はこの単元を中心に』など、自分たちに必要な学びを要求してきました。これには教師も驚かずにはいられませんでした」（及川先生）

入学当初は教師の助言を受けて毎日のスケジュールを立てていた生徒が、2年後には自ら考え、行動する生徒へと成長していた。

図2　生徒が教師に申し出た夏休みの課外表



［数学］ベクトルについての希望日



左は教師の予定を聞いた用紙、右は生徒の予定を各自が記入した用紙。２つの用紙を代表の生徒が取りまとめて、スケジュールを作成した
＊学校資料を基に編集部で作成

中学では、基礎基本の定着を重視

同校は、併設中学校との接続にも力を入れる。09年度には、中2から高3までの5年間のプログラムの系統性を強化した。併設中学校では、中2への進級段階で、高校でのコースを決定する。どの道を選ぶかによって高校生活は大きく異なるため、保護者対象の説明会や三者面談などで詳しい説明を聞いた上で選んでもらう。

学習面での違いは、Ｔｙｐｅ１コースでは中2から部活動を辞めて勉強一筋の生活となり、Ｔｙｐｅ２コースでは中学段階の内容をしっかり定着させることを重視する。

「高校の学習に付いていけないＴｙｐｅ２の生徒の中には、中学段階の基礎が身に付いていない者が見受けられました。高校で時間を有効に使い、学力を付けさせるためには、中学の基礎の定着は必須でした」（及川先生）

また、Ｔｙｐｅ２には、４分の３程度の外進生がいる。中学での基礎的な内容の定着度には差があり、個別対応が必要とされている。

「高校入学当初、中学段階の基礎的な内容が身に付いていない生徒には基本的な課題を出し、余力のある生徒には発展的な内容のプリントを渡します。『先生は自分のことを見てくれている』という意識が、生徒の学習意欲を引き出すと思うからです」（鈴木先生）

増えた生徒に対する従来の指導の継続が課題

10年春、同校の受験者数は増加し、入学者数は09年度を大幅に上回った。中でもＴｙｐｅ２の入学者は09年度の51人から倍増し１０２人となった。学校全体の実績が着実に上昇したこと、10年度入試で宮城県の公立高校の学区が撤廃され、全県一区になったことが、大きな要因だ。

また、10年春に卒業したＴｙｐｅ２の１期生27人のうち、７人が国公立大に合格し、首都圏の難関私立大にも合格者が出た。中学生や保護者が同校に対して抱くイメージは、かつての「部活動が盛んな女子校」というものからはまるで違うものに変わっている。

課題は、増加した入学者への対応だ。これまでＴｙｐｅ２では、小規模ならではの特徴を生かし、マンツーマンに近い形できめ細かなサポートを徹底してきた。それが、学習にも部活動にも全力で取り組む生徒たちを後押しする大きな力になってきた。しかし、生徒数が増えた今、この個別対応にも見直しが必要である。

「これまでの取り組みの良さを残しつつ、一層の強化を図り、生徒の自主性を伸長していきたいと考えています」（及川先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2005年10月号 ナレッジの継承「部活動顧問の進路面談」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）